

## 配石遺構についての一考察

上 野 佳 也

### 1 はじめに

日本における配石遺構は、縄文時代に盛んに行われた埋葬法であり、中期末から急増し、後期前半にもっとも盛んになったが、言うまでもなく早期・前期にもすでにかなり形の整ったものが存在している。前期の長野県上原・阿久の両遺跡は、その規模においても後期のものと全く異ならない。

そこで、このような縄文時代の配石遺構の消長を巨視的にみると、早期、前期には局地的に存在していて、中期前半はいったん衰え、後半から少しずつ増えていき、後期に至って爆発的に広がり、後期後半から再び衰えていくという過程を経ていることが分かる。

その後、弥生時代に入ると、石を配した遺構はないわけではないが、縄文時代の系統の配石遺構はほとんどみられなくなる。中世のものでは、東京都三宅島中郷遺跡<sup>1)</sup>などの積石遺構があるが、例は少ない。要するに、日本において配石遺構がもっとも発達したのは縄文時代ということになる。

ところが、縄文時代の中期末から後期前半に盛行した配石遺構は、ほとんどが墓であると分かっているにもかかわらず、埋葬当時の配石以外の形態や葬送儀礼の跡などについては、若干の副葬品以外は明らかになっていない。

そこで本稿では、以下に国外における例を取り上げ、比較検討しながらこの問題について考えていきたい。

### 2 国外における配石遺構

人が石を配した遺構は世界各地にみられることは言うまでもないが、ここでは特に北アジア、アラスカにおける例を取り上げて比較考察してみよう。図1～3は、斎藤忠氏<sup>2)</sup>が報じたモンゴルにおける突厥の配石遺構である。同氏の報告によれば、この遺跡はホジルトという町の郊外にあって、100基内外を数えるほどあり、6形式に分類される。1は本格的なストーンサークルであり、大きいものは外径が50メートルぐらい、小さいものは30メートルぐらいで、18基ぐらいあるという。その内部の中央は、ほぼ円形に石を敷きつめてあり、遺骸を埋葬した所と考えられている。2は、石材を立てて巡らしているが、円形のものや長方形または方形のものがある。その一例は、一辺3.40メートル、他辺2.20メートルぐらいである。3は、1のストーンサークル内部のものだけが遊離して存在するものである。4は、長方形または方形で、四隅に立石を配している(図3)。その一つ

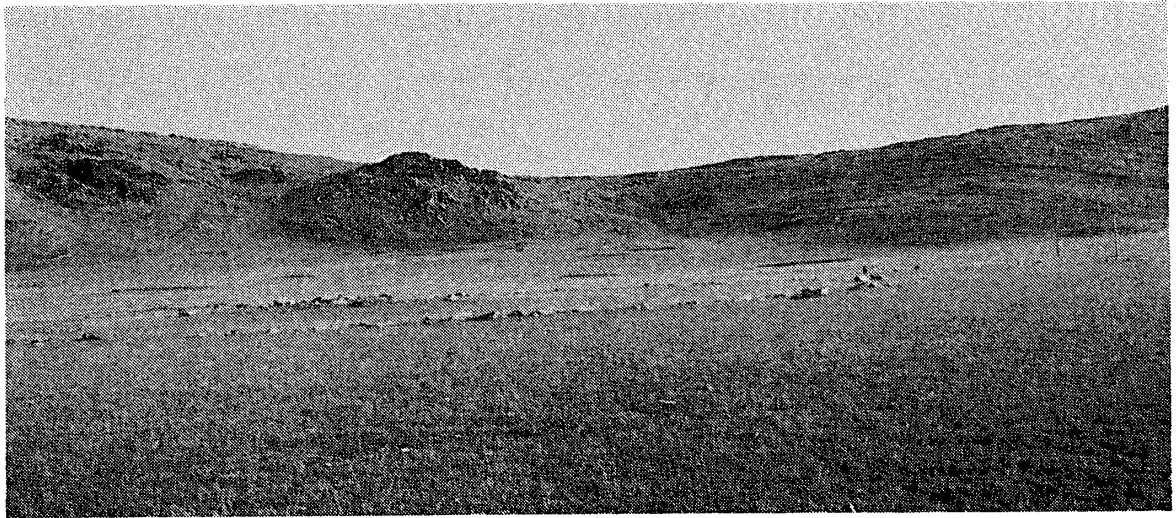


図1 モンゴル、ホジルト郊外の配石遺構（斎藤忠氏撮影）

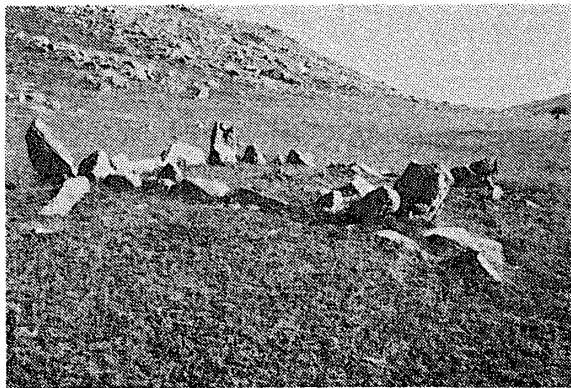


図2 モンゴル、ホジルト郊外の配石遺構  
（斎藤忠氏撮影）



図3 モンゴル、ホジルト郊外の配石遺構  
（斎藤忠氏撮影）

は、一辺2.30メートル、他辺が1.70メートルで、四隅の立石の高さは74センチである。5は、単独の立石、6は、まわりに土塁を囲み、内部がくぼんでいて、そこに石材が無秩序に置かれているという。この配石遺構は、突厥時代と言われているが、どの程度の調査が行われているかは定かでないと言葉氏は述べている。

次に駒井和愛氏は、その著『音江』<sup>8)</sup>において、シベリア大陸の配石遺構について論じているが、『周書』巻五十・異域傳・突厥の条を引き、北海道の配石遺構を考える場合の参考になると述べている。

この突厥の条には、石を配して墓とするが、生時に戦争で敵を殺した数だけ立石を立てるという習慣が記されている。

葬訖於墓所立石建標、其石多少依平生所殺人數、又以祭之、羊馬頭盡懸挂於標上。

大陸における配石遺構は、このほか各地で報告されているが、西域フェルガーナ地方のものも<sup>4)</sup>、日本の配石遺構に酷似している（図4）。配石遺構は、さらに西方にもあり、南はインドにもあるが、駒井氏は、西欧から北欧、チベット、西域、南はイラン、インド、北はシベリア、蒙古、中国

配石遺構についての考察

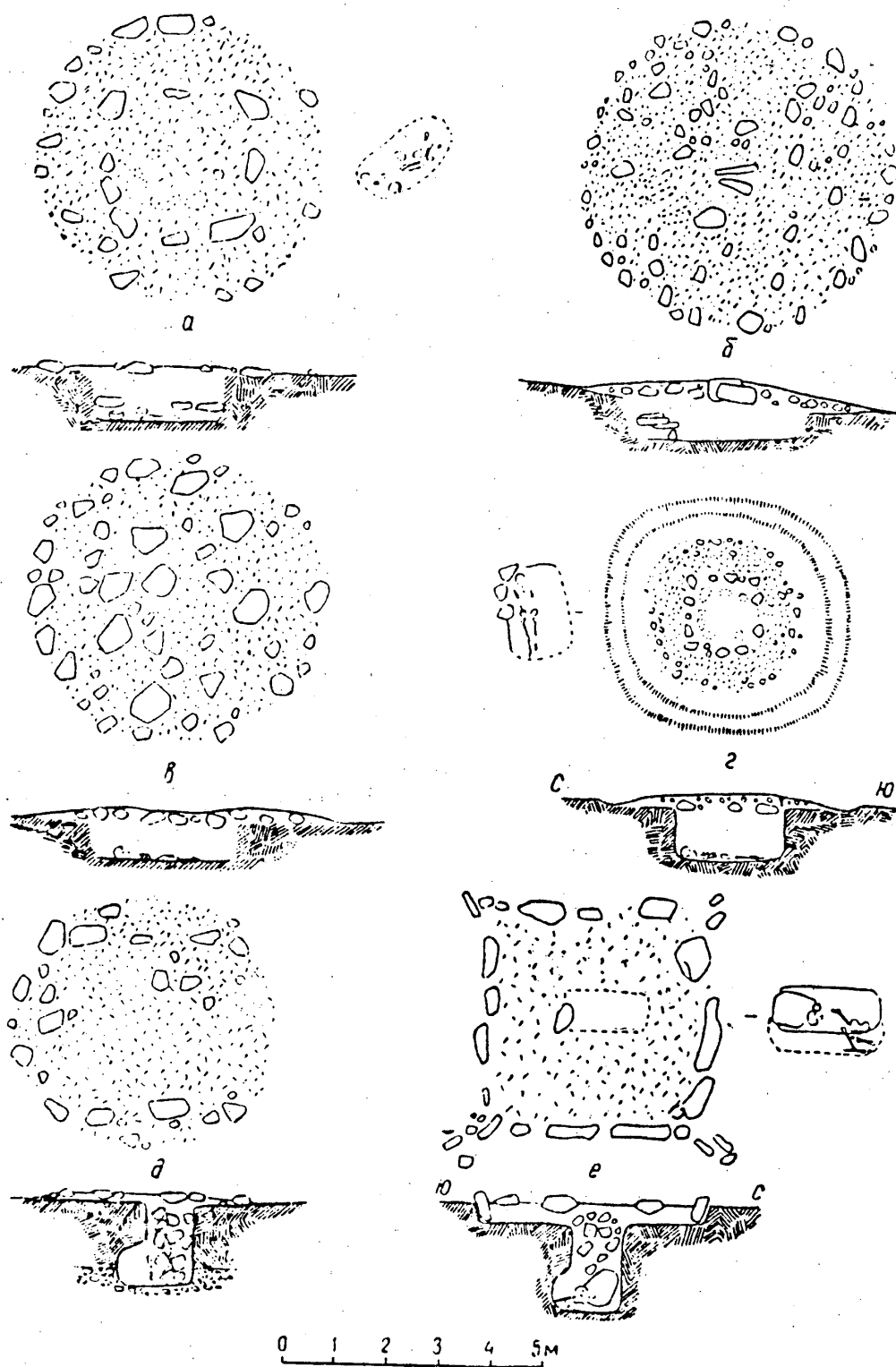


図4 フェルガーナ地方の配石遺構（註4の рис. 76 より）。

の東北地方から朝鮮、日本の北海道に分布している配石遺構を一元的なものとみている。

次に、筆者が1966年に訪れたアラスカのインディアンの村の配石遺構について述べていこう。この配石遺構には100年以上前のものから、現在のものまでであることが特徴的である。従って配石墓と言うほうが適切である。この配石墓は、アラスカのアンカレッジの北東約36キロメートルにある Eklutna という所のインディアンの村にあるが、当時アラスカ・メソジスト大学で教鞭を執っておられた山本雅彌氏、N. Y. Davis 女史に案内して頂き、訪れる機会を得たのである。

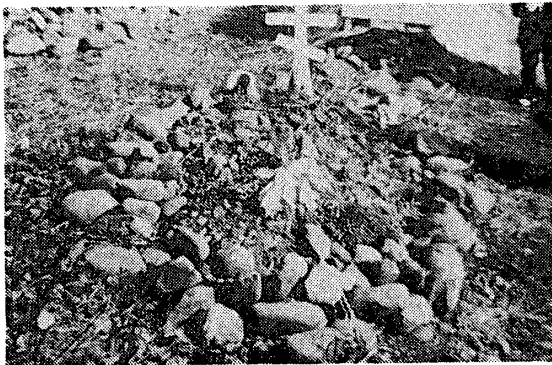


図 5 アラスカ, Eklutna の配石墓 (上野佳也撮影)

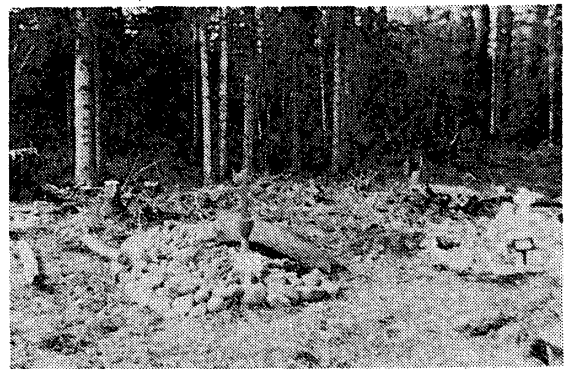


図 6 アラスカ, Eklutna の配石墓 (上野佳也撮影)

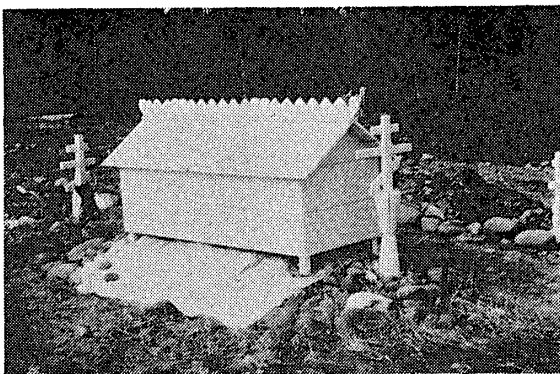


図 7 アラスカ, Eklutna の配石墓と祭堂 (上野佳也撮影)

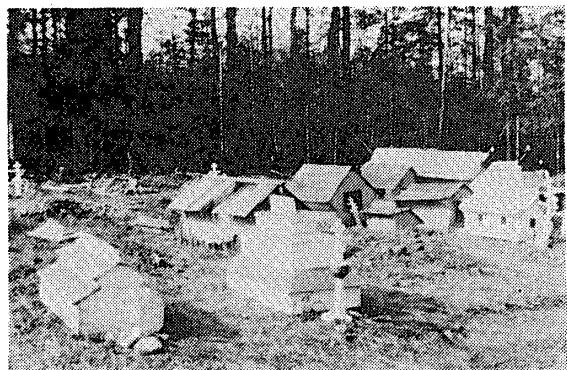


図 8 アラスカ, Eklutna の祭堂 (上野佳也撮影)

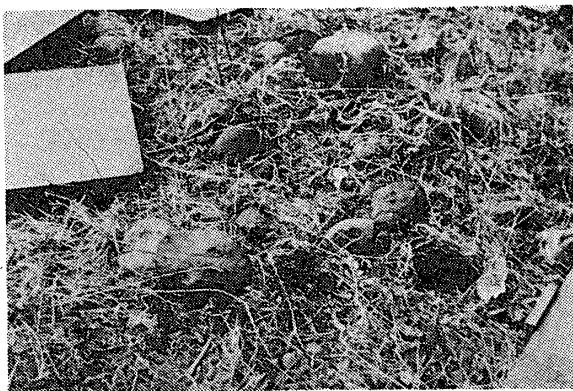


図 9 アラスカ, Eklutna の蒸し風呂の焼石群  
(上野佳也撮影)



図10 秋田県大湯野中堂遺跡の配石遺構  
(斎藤忠氏撮影)

この村にはロシア正教の教会があり、その続きに墓地があった。墓地の墓には幾つもの型があった。

その一は、石を直径1.2メートルぐらいの環状に配したもので、ロシア正教の十字架があり、環の内部に石はないが、供え物があった（図5）。その二は、同じぐらいの大きさであるが、ほぼ全面を石が覆っていた。その上に布が掛けられてあったと思われる（図6）。その三は、配石を布が覆っていて、その上に高さ60～70センチぐらいの祭堂が置かれていた（図7）。その四は、配石が無く、祭堂のみが置かれているものである。これらの祭堂には、それぞれ赤や黄色の色が塗られていた（図8）。なお遺体は地下に埋葬されている。

またこの村には、今は使われていないが、蒸し風呂があり、それに用いた焼石が居住区域にみられた（図9）。

そこで、これらの資料を基に若干の考察を加えていこう。

### 3 内外における配石遺構の形態の比較

以上、国外における配石遺構をあげてきたが、次に形態について日本列島内のものと比較してみよう。

まず斎藤氏の報告したモンゴルの配石遺構をみると、同氏も言うように北海道、東北地方に類似のもの<sup>5)</sup>がある（図11）。特にその4（図3）は、斎藤氏の指摘のように、秋田県鹿角市大湯遺跡の配石遺構<sup>6)</sup>に類似している（図10）。

次に、駒井氏の取り上げた西域フェルガーナの配石遺構（図4）も、北海道ニセコ町狩太北栄の環状列石<sup>7)</sup>に類似している（図12）。また先の文献には突厥に配石墓の風習があることが記されている。

以上のように、北方大陸にも、日本の北海道、東北地方の配石遺構に極めて類似したものがあっ

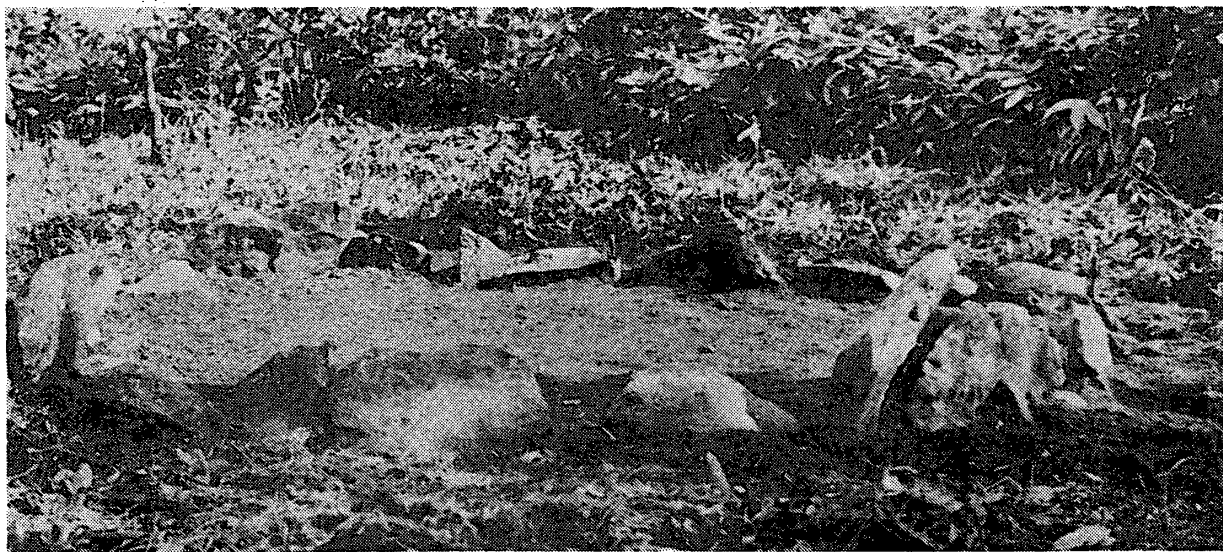


図11 北海道音江向陽の環状列石（註3の図版三の上より）

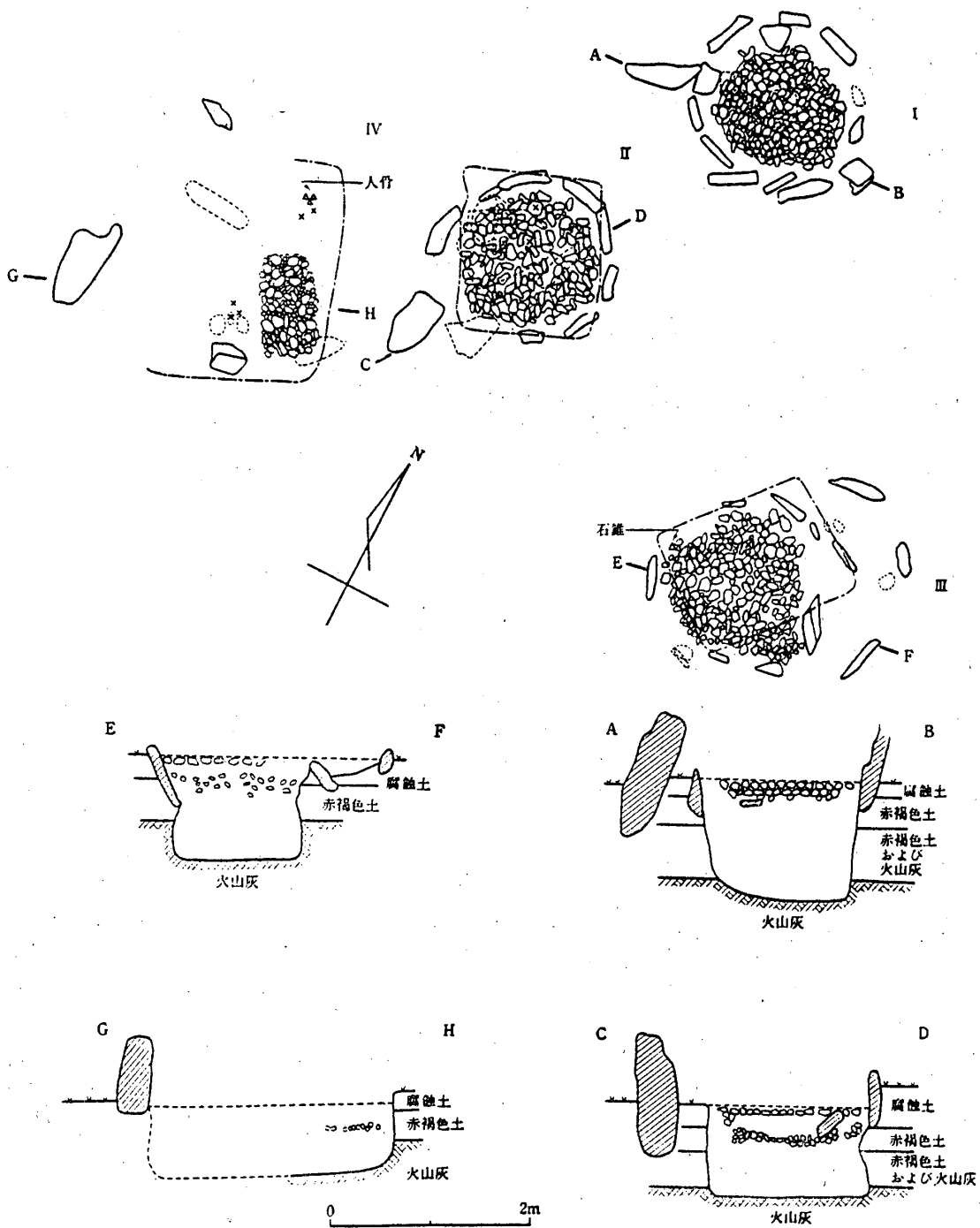


図12 北海道狩太北栄の環状列石（註3の第三四図より）



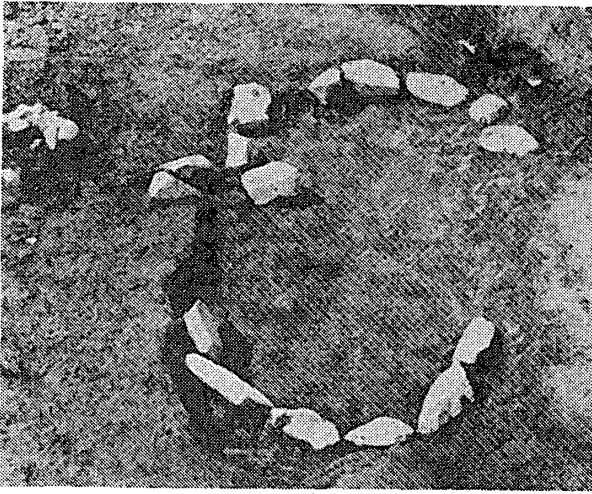


図13 東京都池の上遺跡の配石遺構（註8のグラフ周石土墳墓より）



図14 長野県茂沢南石堂遺跡第1地点配石遺構域7号遺構

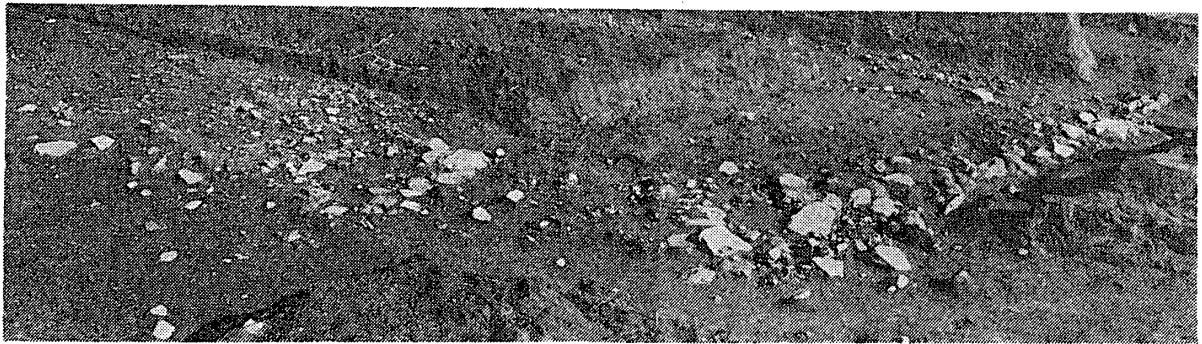


図15 長野県茂沢南石堂遺跡第3地点環状列石

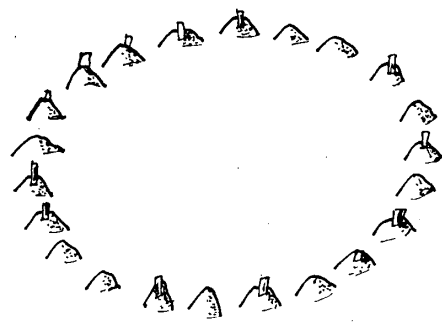
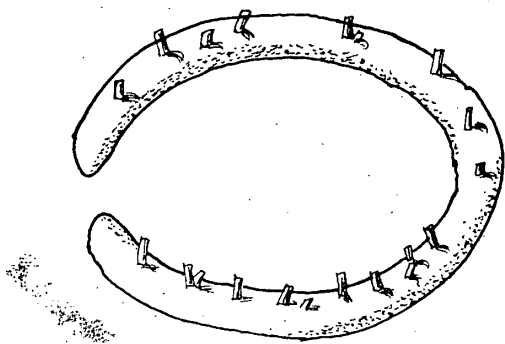


図16 環状配石墓原状想定図

た。しかしそこに、年代の差があることは言うまでもない。

次にアラスカの配石墓をみてみよう。ここでも、その一は配石の状態だけを見れば、図13の東京都池の上遺跡の周石墓<sup>9)</sup>に類似している。ただ、池の上の遺構は石が土坑内部の周壁を巡っている点異なる。その二も、長野県軽井沢町茂沢南石堂遺跡のもの<sup>9)</sup>と同じ形態のものである(図14)。しかし、アラスカのものは現代の配石墓である。

ところが、もしこの Eklutna の村の人びとが何らかの理由でこの土地を立ち退いたとすれば、長い年月の後に、ここにも縄文時代の配石遺構と全く同じような遺構が残るであろう。また先に述べた居住地域の蒸し風呂の焼石なども、集石のようなものとして残るかも知れない。

このようにみてくると、日本の縄文時代後期の配石遺構にも、大陸における突厥の配石遺構にも、またアラスカの現代の配石墓にも形態的には全く同じものがあるということになる。つまり、地域によってその消滅の時期に著しい差がみられるのである。

そこで、日本の配石遺構が北方系のものか、それとも日本列島で独自に発生したものかということが問題になる。

縄文時代の配石遺構は、先にも述べたごとく、初期のものは早期・前期に本州の中部地方等に見られ、しかも形態の整っているものがある。そのようなものは、今のところ北海道では発見されていない。また北海道にこの系統の配石遺構が出現するのは、本州の後期の土器の伝播とかかわり合いが深い。これらのことから考えれば、縄文時代の配石遺構は本州で発生したものであると言える。

#### 4 葬送儀礼についての検討

それでは、日本国内と国外のものを比較することは無意味かという、決してそうではない。そこで行われた葬送儀礼に関しては、以下のように別の視点から考えていくことができる。

まず長野県茂沢南石堂遺跡で得られた以下の知見である。この第3地点には、外径約50メートルと推定される環状列石の一部が残っていた。これは先述のような組石の集まった環状列石であるが、ここでは組石の構築された面の上に黒色土があり、それが環の内側に向って薄くなっていき、やがて消えていく。そして、その上に土器片が内側に向かって流れるように散っていた(図15)。この事実から、次に第2地点を発掘するに当たっては、配石の頭が出てきた時点で慎重に掘っていった結果、そこに環状の土塁があることが明らかになった。このことから図16のような盛り土のある墓が推定されるに至ったのである。また土器が供えられていたことも、さらにそこに有機物が盛られていたことも推定できるのである。



図17 秋田県大湯野中堂遺跡特殊組石(斎藤忠氏提供)



# 配石遺構についての一考察

墓に盛り土があるのはむしろ当然のことであるが、従来は発掘の際、配石が頭を出ると一挙に配石の乗っている面まで掘り下げてしまうため盛り土の崩れた層を明らかにすることができなかったのである。

そこで盛り土があれば、そこに何らかの標柱があったのではないかと考えられる。まずそれは木か石の標柱であろう。石の標柱、特に中心に立てる立石は秋田大湯、小坂<sup>10)</sup>、岩手県樺山遺跡<sup>11)</sup>等各地で発見されていることは言うまでもないが、有機質の標識については、かつて坂詰秀一氏<sup>12)</sup>らがその存在を推定していた(図17, 18, 19)。ところが、最近岩手県稗内遺跡<sup>13)</sup>や石川県真脇遺跡<sup>14)</sup>でトーテム・ポール状の彫刻のある木柱が発見されるに及び、これがそのまま墓標であったとは言えないにしても、木製の標柱の存在は十分考えられるに至った(図20, 21)。

次にアラスカの Eklutna の墓に見られた祭堂が問題になる。Eklutna では、配石を伴うものと配石の無いものがあったが、いずれにしてもこのような祭堂は、東アジア沿海州の諸民族にも見られたものである。18世紀から19世紀初頭にかけての間宮 林蔵の報告<sup>15)</sup>には、スメレンクル(ギリヤーク)の風習について次のように記されている。

一、死亡の事は夷の殊に忌むところなれど林蔵其事を聞ざれども、其見るところ、人死する時は衆夷涕泣して是を悲しむこと甚深く、其葬事を行ふ事、南方と大に異にして、死人を焼、其骨をひろふ。家側に祀堂を造り、其側ヲロコ夷の棺の如き物を設く。是蓋し骨を納る物なるべし。祀堂高さ凡二尺餘、廣は是に

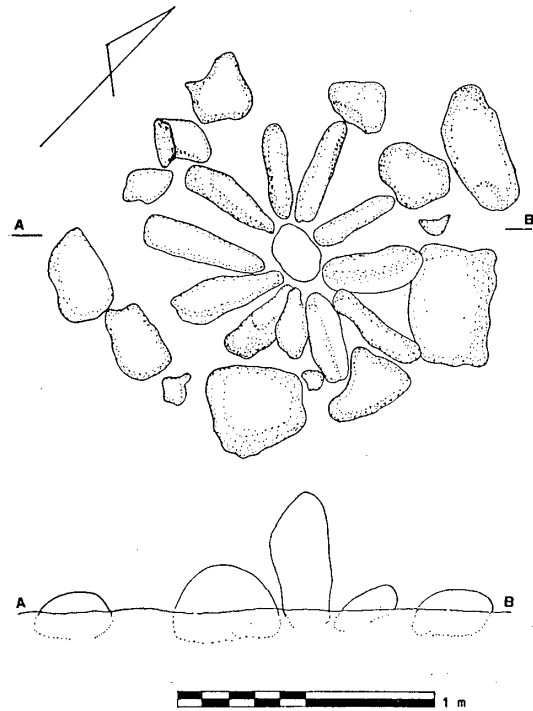


図18 秋田県小坂環状列石第1号組石実測図  
(註10の Fig. 9a より)

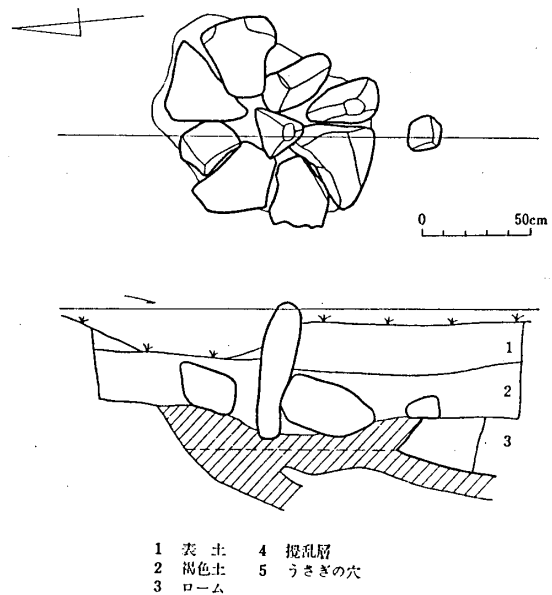


図19 岩手県樺山遺跡第26号配石遺構実測図  
(註11の第11図より)

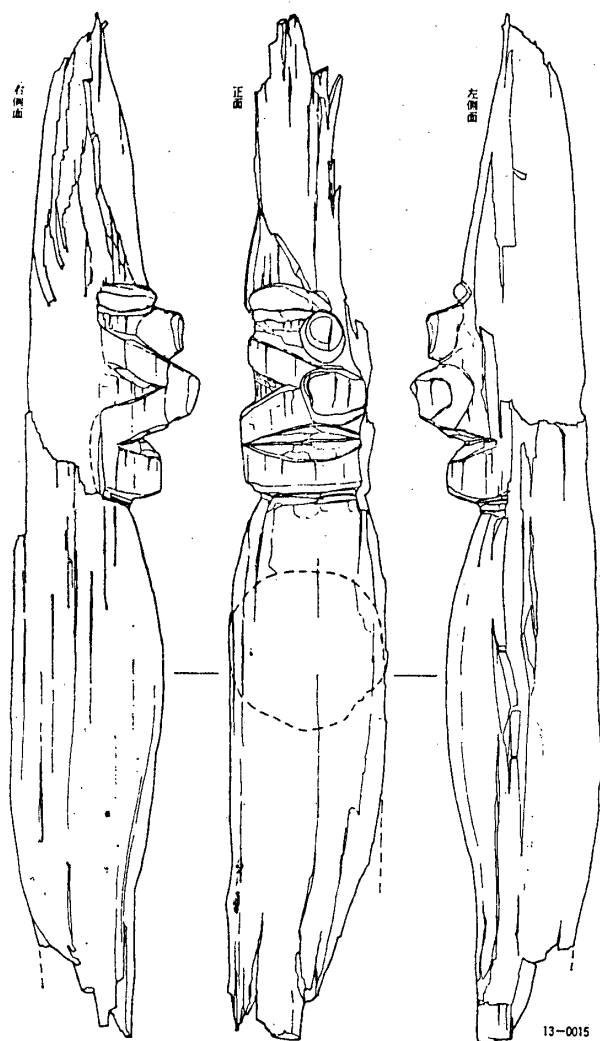


図20 岩手県萩内遺跡出土の彫刻のある木柱実測図  
残長約65.5センチ（註13の図版602より）



図21 石川県真脇遺跡出土の彫刻のある木柱 長さ250cm（註14の2頁より 北国新聞社提供）

かなふ。板を以て是を製し、其内に圖のごとくなる神主を置、魚肉、煙草の類を供して是を祭る。神主に結著するものは、布帛の裂なり。如レ斯三四年の間是を祭ること甚厚く、後悉く毀ち去ると云。（「北蝦夷圖説卷之四」『北門叢書』第五冊』より）（図22）

L. V. シュレンク<sup>16)</sup>によれば、19世紀中葉の沿海州アムール河流域では、ギリヤークは、遺体は火葬し、その墓に祭堂を安置する（図23, 24）、またオルチャ、オロッコなどは遺体を木棺に入れて祭堂に納めるとしている（図25, 26）。

これらの祭堂はアラスカのものと同じものであるが、アラスカでは土葬し、遺体を祭堂には入れていない。

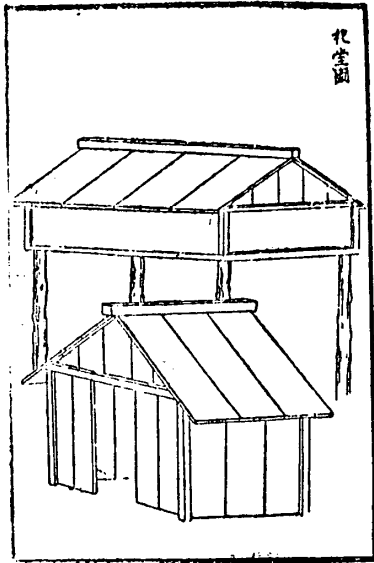


図22 スメレンクルの祭堂  
(註15の 373 頁の図より)



図23 ギリヤークの火葬の図  
(註16の Schrenck 論文の Taf. LXV より)

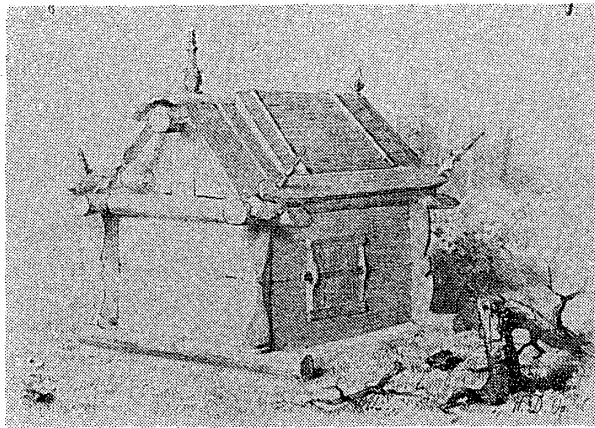


図24 ギリヤークの祭堂  
(註16の Schrenck 論文の Taf. LXVIII より)



図25 オルチャ (ゴールド?) の祭堂  
(註16の Schrenck 論文の Taf. LXX より)

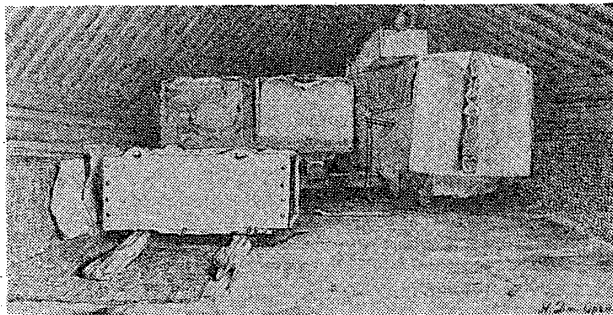


図26 オルチャ (ゴールド?) の祭堂内部の木棺  
(註16の Schrenck 論文の Taf. LXX より)



図27 長野県茂沢南石堂遺跡第4地点の焼石群

次に、日本における葬制の歴史を振り返ってみると、三世紀前半の頃のことについて、『魏志』倭人傳に、

始死停喪十餘日、當時不食肉、喪主哭泣、他人就歌舞飲酒。

とある。しかしここでは祭堂のようなものについては記されていない。

次に『古事記』の天若日子の葬送について

作喪屋。

とあり、また、『日本書紀』にも、大化二年(646)三月甲申の詔に

凡王以下、及至庶民、不得營殯。

とある。すなわちここでは、王以下の喪屋を営むことを禁じている。

このもがり(殯)の風習が、日本においてはどこまで遡り得るのか明らかでないが、斎藤忠氏<sup>17)</sup>は、この風習はすでに弥生時代に行われていたものと考えている。

さらに同氏は、『北史』列傳第八十二の高句麗傳に、

死者殯在屋内、經三年擇吉日而葬。

とあることを、喪屋を設けたことと考え、もがりの行われたことを推定している<sup>18)</sup>。

このように、喪屋を設けることは古くよりかなり広く行われていた風習であるが、縄文時代に行われていたか否かは現在のところまだ明らかになっていない。

しかし斎藤氏<sup>19)</sup>は、岡山県津雲貝塚で人骨のそばに火を焚いた跡のあることなどから、縄文時代にすでに燔火の風習があったと考えている。長野県茂沢南石堂遺跡においても、縄文時代の墓のそばに焼石群があるが、これもそのような火を焚いた跡と考えてよいであろう(図27)。

もしそうであれば、北アジアに広がるもがりの風習がここにすでにあったことも推定できるのである。さらにまた北アジア、アラスカにおける例から、板葺きでないにしても、縄文時代の配石墓にも喪屋あるいは祭堂のようなものが置かれ、あるいは毛皮などが掛けられ、葬送の儀礼が行われていたことが考えられる。

## 5 おわりに

それでは、縄文時代にもがりのような風習があったか否かを今後明らかにしていくにはどのようにしたらよいであろうか。

それには、まず配石遺構の発掘に当たって、配石が出てきた段階から慎重にその内外の土を採取し、自然科学的な分析を行うことが必要であろう。イラクのシャニダール遺跡<sup>20)</sup>において、花粉分析によって献花の行われていたことが明らかにされたことや、最近では残存脂肪酸<sup>21)</sup>の分析も行われていることからそのような研究はぜひ行われねばならない。

それによって、配石墓について単にその配石の形態だけでなく、そこで行われた葬送儀礼も含めて考えていくための重要な手掛りを得ることができるであろう。

本稿を草するに当たり、大正大学名誉教授斎藤忠博士の御好意により貴重な写真を提供して頂き、

種々御教示賜ったこと、また文献について飯島武次、今村啓爾、安斎正人、辻森由美子、吉岡康暢の各氏にお世話になったことを記して感謝の意を表したい。

註

- 1) 後藤守一・梅沢重昭「三宅島坪田における中世遺跡の調査」『東京都文化財調査報告書』6, 伊豆諸島文化財総合調査報告第1分冊, 東京都教育委員会, 1958。  
橋口尚武「三宅島における積石遺構について」『三宅島の埋蔵文化財』, 東京都三宅村教育委員会, 1975。  
國學院大学文学部考古学研究室『中郷遺跡1982』國學院大学文学部考古学実習報告第4集, 1982。
- 2) 斎藤忠「モンゴルの配石墓」『考古学ジャーナル』115, ニュー・サイエンス社, 1975。
- 3) 駒井和愛『音江』慶友社, 1959。
- 4) Бернштам, А. Н. 1952. Историко-археологические очерки Центрального Тянь-Шаня и Памиро-Алая, 《Материалы и исследования по археологии СССР》, No. 26, Издательство Академии Наук СССР, Москва・Ленинград: 185-207。
- 5) 註3)の図版三の上。
- 6) 斎藤忠他『大湯町環状列石』埋蔵文化財発掘調査報告第二, 文化財保護委員会, 1953。
- 7) 註3)の第三四図。
- 8) 梶国男・佐々木蔵之助「八王子市池の上遺跡の発掘調査」『考古学ジャーナル』163, ニュー・サイエンス社, 1979, グラフ。
- 9) 上野佳也編『軽井沢町茂沢南石堂遺跡』軽井沢町教育委員会, 1983, 図版六上。
- 10) 奥山潤他『小坂環状列石墳墓』秋田県小坂町教育委員会他, 1969, Fig. 9a。
- 11) 草間俊一・江坂輝彌他「北上市稲瀬町樺山遺跡調査概報(第三次)」『北上市史』第一巻, 北上市, 1968, 第11図。
- 12) 坂詰秀一「日本石器時代墳墓の類型的研究」『日本考古学研究』, 1961, 恭和印刷, 32頁。
- 13) (財)岩手県埋蔵文化財センター他『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 盛岡市 萩内遺跡(Ⅱ)図版』岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第32集 岩手県埋蔵文化財センター, 1982, 図版602。
- 14) 山田芳和編『真脇遺跡発掘調査概報』石川県能都町教育委員会, 1984, 18頁。
- 15) 間宮倫宗口述・秦貞廉編「北蝦夷図説」(銅柱余録), 大友喜作編『北門叢書』第五冊, 北光書房, 1944, 367頁。
- 16) Schrenck, L. v., 1895. *Die Völker des Amur-Landes, Reisen und Forschungen im Amur-Lande*, Band III, St. Petersburg: 764-768, 773-775。  
藤本強「オホーツク文化の葬制について」『物質文化』6, 1965。
- 17) 斎藤忠『墳墓』日本史小百科4, 近藤出版社, 1978, 21頁。
- 18) 同上。
- 19) 同上 32頁。
- 20) Leroi-Gourhan, A., 1968. Le Néanderthalien IV de Shanidar, *Bulletin de la Société Préhistorique Française*, 65-1: 79-83。  
Leroi-Gourhan, A., 1975. The Flowers Found with Shanidar IV, a Neanderthal Burial in Iraq. *Science*, 190: 562-564。
- 21) 佐原眞・中野益男「脂肪酸分析と考古学」『日本考古学協会第50回総会研究発表要旨』, 1984。  
中野益男「残存脂肪分析の現状」『歴史公論』6, 雄山閣, 1984。

上 野 佳 也

## A Study of Haiseki-bo (Graves with Arrangements of Stones)

Yoshiya UENO

Many tombs with arrangements of stones have been excavated from sites of the Jomon period. However, detailed data of the associated mortuary practices are not known except for the stone arrangements or a few other funerary items. In this paper the author compares Japanese Haiseki-bo to similar graves of Mongolia, Siberia and Alaska, and studies mortuary practices on the basis of Japanese and Chinese classical documents. The author supposes that mortuary custom of erecting a hut over the burial dates back to the Jomon period.